

Research on "interactive learning" to train the  
"viewpoint and way of thinking": Practice of  
physical education class

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野津, 一浩, 大場, 洋典, 齋藤, 剛 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00029268">https://doi.org/10.14945/00029268</a>

## 見方・考え方を鍛えるための「対話的な学び」に関する研究 ～体育の授業実践を例にして～

Research on "interactive learning" to train the "viewpoint and way of thinking": Practice of physical education class

野津 一浩<sup>1</sup>, 大場 洋典<sup>2</sup>, 齋藤 剛<sup>3</sup>

Kazuhiro NOZU, Hironori OHBA and Tsuyoshi SAITO

(令和4年11月30日受理)

### ABSTRACT

#### Aims

The purpose of this study is to discuss the intention and significance of "interactive learning" for "train your viewpoint and way of thinking" a goal common to all subjects.

#### Methods

We examined "interactive learning" as a means of learning to achieve the objectives of the subject matter. First, the purpose common to all subjects, "train your viewpoint and way of thinking" is summarized from the perspective of structuring knowledge. Second, we interpreted "interactive learning" to "train your viewpoint and way of thinking". Finally, based on specific examples of physical education class practice, we discussed the construction of a curriculum designed to deepen understanding of concepts and principles, the flow of a unit intended for "interactive learning," and the actual conditions of specific children.

#### Results and Discussion

The "train your viewpoint and way of thinking" means that elemental and individual knowledge is associated and the structure of knowledge is recombined as the understanding of concepts and principles is deepened. It was interpreted as the activity of constructing the abstract, the general, and the universal from the concrete, the particular, and the individual. Constructing ideas from one's multiple elemental and individual knowledge and then confronting and dialoguing with others about these ideas was considered to be thinking in a way that clarifies commonalities and dissimilarities with others. It is believed that the systematic building up of the above dialogue will deepen understanding of concepts and principles and reconstruct one's own ideas as the structure of knowledge is reconfigured.

In physical education classes, it was considered necessary to extract concepts and principles that can be related to superficial movement events and comprehensively grasped from the mechanisms inherent in the

---

<sup>1</sup> 保健体育教育系列

<sup>2</sup> 静岡大学教育学部附属浜松小学校

<sup>3</sup> 静岡福祉大学子ども学部

sporting event handled. Then, interactive learning must be developed with the aim of deepening the understanding of the extracted concepts and principles. For this purpose, the importance of a curriculum with systematized concepts and principles was confirmed. In addition, dialogic thinking within the framework of the unit was considered. Specifically, it is to formulate a hypothesis (prediction) on a question concerning an event of motion, verify it through actual motion, and formulate one's own idea on the question. Then, as they compare their ideas with others, they try to find commonalities and dissimilarities, and combine their thoughts to create new ideas. Through the accumulation of such activities, it was considered possible to develop a viewpoint and way of thinking that can relate to one's own knowledge and comprehensively understand the mechanism of exercise in sporting events.

## 1. はじめに

### (1) 問題の所在

教科の学習に対して、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」が授業改善を進める視点として示されている<sup>1)</sup>。これを受けて、体育科・保健体育科においても、主体的・対話的で深い学びの実現に向けたこれからの体育授業に関する議論が行われている<sup>2)</sup>。しかしながら、それらの議論の内容を概観すると、体育授業の枠組みの中で主体的・対話的で深い学びをどのように実現していくのかというような意味合いで議論されているように思われる。それ以前に、何のための主体的・対話的で深い学びなのかということの検討がなされていない。このまま議論が進められていくなれば、運動種目主体で行われてきたこれまでの体育授業実践の内容を都合よく当てはめようとする検討が進められていくことが危惧される。主体的・対話的で深い学びは、すべての教科に共通する視点として示されたものと読み取ることができ、体育授業の枠組みに引き取る前に、教科の枠組みを取っ払ったところで理解が深められなければならない。

とりわけ、「対話的な学び」の視点は、話し合いを行うなどの活動が思い浮かびやすいがゆえに、教科として学ぶ目的の理解が不十分なままだと、その活動自体が目的化してしまうことが問題として指摘されている。前回の学習指導要領<sup>3) 4)</sup>では、「言語活動の充実」によって思考力・判断力・表現力をはぐくむことが求められていたが、次期学習指導要領への改訂作業において下記に示すような課題があげられている<sup>5)</sup> ことから、十分な検討が必要と考えられる。

- ・授業や単元の中で明確な意図を持った位置付けがされておらず、単なる話し合いにとどまり形骸化していて、画一的な指導方法となっている例
- ・目的意識が不明確であったり、単元全体を通じて常に言語活動を行わなければならないと誤解したりしていることにより、言語活動を行うこと自体が目的化してしまっている例
- ・発表や討論に重きが置かれる一方、その前段階として、自分の考えを持たせるための論述等の活動や、発表の後に様々な意見や考えを比較・検討してまとめていくことが十分に行われていない例

特に体育科においては、森が「言語活動の充実」に関するテーマを掲げた事例を検討し、記述活動や対話活動の導入について、「言語活動の形式的導入になっていると考えられるものがあった」ことを指摘している<sup>6)</sup>。

以上のことから、すべての教科を貫く目的に迫ろうとする視座から、そのための「対話的な学び」とは何なのか、その意義や意図を解釈し理解を深めることが必要と考えられる。そして、その解釈や理解に基づいて、体育授業の「対話的な学び」の具体を検討することが重要である。

## (2) 研究の目的と方法

教科の目的に迫るための学びの手段という位置づけで「対話的な学び」の検討を行った。

まず、すべての教科を貫く目的として見方・考え方を鍛えることを中核に据え、知識の構造化の視点からその内実を整理した。次に、見方・考え方を鍛えるために必要な対話的な学びとはどのようなものなのかについて解釈を行った。続いて、体育授業実践の具体を例に取り上げ、概念や法則の理解を深めることを企図したカリキュラムの構築、対話的な学びを意図した単元の流れ、具体的な子どもの実情について考察した。

本稿において取り扱われた体育授業実践の具体は、令和3年10月にS大学教育学部附属H小学校の0教諭によって行われたものである。授業は、小学3年生を対象とし、跳び箱運動(器械運動)を利用した学習における授業実践が展開された。この実践における児童の活動の様相や学習カードの記述に対して考察を加え、本稿で解釈した「対話的な学び」の視点からその価値を検討した。

以上の手続きにより、すべての教科を貫く目的の中核に据えられる見方・考え方を鍛えることを企図した「対話的な学び」の意図や意義について論じることを本稿の目的とした。

## 2. 教科の学習で育成する資質・能力

### (1) 見方・考え方を鍛えるとは知識の構造を組み替えていくこと

今次の学習指導要領で求められている資質・能力の育成は、すべての教科を貫く位置で解釈され理解を深めることが必要と考えられる。学習指導要領の改訂にあたり、教科等別の部会が立ち上げられる前に行われた教育課程企画特別部会での議論の内容からその意図を読み取ることができる。その論点整理には、「指導すべき個別の内容事項の検討に入る前に、まずは学習する子供の視点に立ち、教育課程全体や各教科等の学びを通じて『何ができるようになるのか』という観点から、育成すべき資質・能力を整理する必要がある」と説明されている<sup>7)</sup>。このことは、まずは、教科の枠を作らないところで資質・能力を整理し、それらを育成していくために各教科で何をどのように学んでいくのかを検討していくものという理解が必要であることを意味している。また、「こうした検討の方向性を底支えするのは、『学ぶとはどのようなことか』『知識とは何か』といった、『学び』や『知識』等に関する科学的な知見の蓄積である」と説明されている<sup>7)</sup>。そして、「身に付けるべき知識に関しても、個別の事実に関する知識と、社会の中で汎用的に使うことのできる概念等に関する知識とに構造化されるという視点が重要である」と述べられていることから、教科の学びにおいてどのような知識を身に付けていくことが必要なのか、知識の質を検討することが重要な視点であると捉えられた。教育課程全体を通して育成していく論理的思考力や問題解決能力等の内実として、考えるために働かせることのできる知識とは何なのかを検討することが必要と考えられる。

この知識の質について奈須は、物理の問題の解き方について実施された研究を取り扱い、初心者と熟達者の知識の構造を比較することから説明している<sup>8)</sup>。初心者は、表面的な特徴を連想し法則にたどり着くのに対して、熟達者はいきなり法則を想起してから表面的な特徴のこと

を考えるとこのような違いから、「教科を学ぶとは単に知識の量が増えるだけでなく、知識の構造のありようが、その教科の親学問が持つ固有な構造に近似していくように組み変わり、洗練されていくこと」と述べている。教科の学習を積み重ねることによって、熟達者のような知識構造に組み替えられていくという視点を参考に、筆者らは子どもの知識の構造が組み替えられていく様相を捉えようとした<sup>9)</sup>。図1は、教科の学習を通して知識の構造が組み替えられていく様相を表したものである。知識が構造化されるということは、様々な事象や現象の背景にある概念や法則に気づいたり、その理解が深まったりすることに伴って、個別的・要素的であった知識が関連付けられ整理されていくことと捉えられた。

教科における探究学習を通してその知識構造を組み替えていくことを、学習指導要領では見方・考え方を鍛えるという言葉で表現していると読み取ることができる<sup>10) 11)</sup>。そして、各教科の目標には、共通して見方・考え方を働かせるということが示されているが、これは、見方・考え方を自在に働かせることができるようになっていくことを目指すものと解釈される。

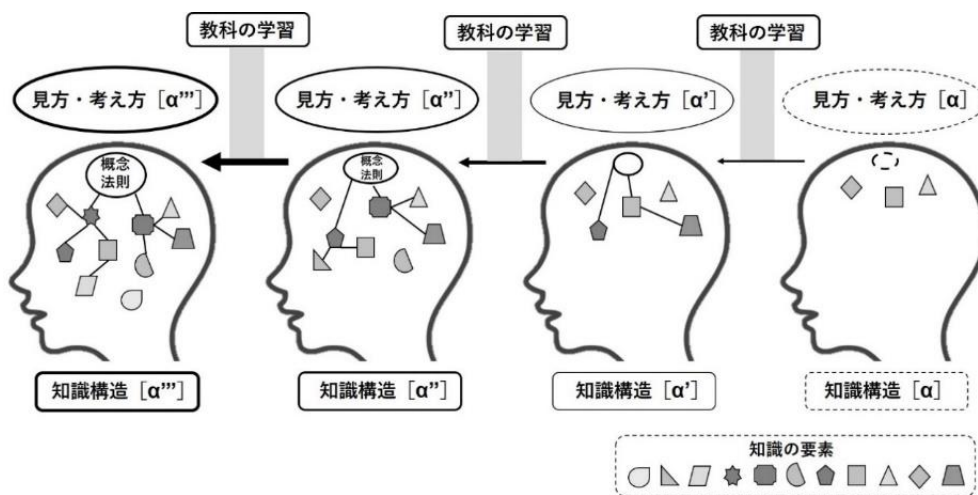


図1 教科の学習を通して知識の構造が組み替えられていく様相

## (2) 各教科の見方・考え方

各教科等の特質に応じた見方・考え方を身に付けるというのは、各教科で取り扱う内容の文脈に沿った学習を通して、例えば社会的な見方・考え方、数学的な見方・考え方を身に付けていくことと考えられる。各教科で取り扱う内容は違えども、その目的は知識の構造化にある。それゆえ、学習指導要領に示された各教科の見方・考え方の内容を整理して眺めてみると、「概念や法則に着目して捉え」「概念や法則の視点で捉え」という部分や、「関連させたり統合させたりして考える」という部分に共通性を見取ることができる(表1)<sup>12~20)</sup>。

ただし、取り扱う内容そのものが目的であるかのように表現されているように読み取ることができる教科も見られた。このことについては、今後、吟味の必要性が考えられる部分であることはおさえておきたい。

表1 各教科の見方・考え方

教科	見方・考え方
国語 「言葉による見方・考え方」	生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること
社会 「社会的な見方・考え方」	社会的事象を、位置や空間的な広がりによって捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けること 社会的事象を、時期、推移などに注目して捉え、類似や差異などを明確にし、事象同士を因果関係などで関連付けること 社会的事象を、政治、法、経済などに関わる多様な視点（概念・理論など）に注目して捉え、よりよい社会の構築に向けて、課題解決のための選択・判断に資する概念や理論などと関連付けること
数学 「数学的な見方・考え方」	「数学的な見方」は、事象や数量や図形及びそれらの関係について概念等に注目してその特徴や本質を捉えること 「数学的な考え方」は、目的に応じて数、式、図、表、グラフ等を活用しつつ、論理的に考え、問題解決の過程を振り返るなどして既習の知識及び技能を関連付けながら、統合的・発展的に考えること
理科 「理科の見方・考え方」	「見方」 エネルギーを柱とする領域では、主として量的・関係的な視点で捉えること 粒子を柱とする領域では、主として質的・実体的な視点で捉えること 生命を柱とする領域では、主として共通性・多様性の視点で捉えること 地球を柱とする領域では、主として時間的・空間的な視点で捉えること 「考え方」 比較、関係付け、条件制御、多面的に考えること
音楽 「音楽的な見方・考え方」	音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること
美術 「造形的な見方・考え方」	「造形的な見方」造形を豊かに捉える多様な視点であり、形や色彩、材料や光などの造形の要素に注目してそれらの働きを捉えたり、全体に注目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりする視点のこと 「造形的な考え方」自分としての意味や価値をつくりだすこと
保健体育 「体育や保健の見方・考え方」	運動やスポーツを、その価値や特性に注目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性に合った「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連付けること 個人及び社会生活における課題や情報を、健康や安全に関する原則や概念に注目して捉え、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境づくりと関連付けること
技術 「技術の見方・考え方」	生活や社会における事象を、技術との関わりの視点で捉え、社会からの要求、安全性、環境負荷や経済性などに注目して技術を最適化すること
家庭 「生活の営みに係る見方・考え方」	家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫すること
外国語 「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」	外国語で表現し伝え合うために、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに注目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること

### 3. 見方・考え方を鍛えるための「対話的な学び」

「対話的な学び」はすべての教科を貫く目的に迫るための手段として示されているものである。すなわち、見方・考え方を鍛えるための手段として対話的な学びを捉えることが必要である。見方・考え方を鍛えるとは、概念や法則の理解の深まりに伴って知識の構造を組み替えていくことであり、一人一人のそれぞれに偏った知識や経験を共有の財産とし、その豊かな具体・特殊・個別の先に抽象・一般・普遍を構築しようとしていく営みである<sup>8)</sup>。その営みこそが対話的に思考していくことと考えられる。

その対話を行うには、まず学習で取り扱う内容に立てられた問いに対して、持っている知識を働かせて自分の考えを作ることが必要である。その考えをお互いに伝え合い、議論していくことが対話的に思考することと考えられる。対話は「言葉を通じてたがいの考えを理解し合うこと」<sup>21)</sup>と言われることについて、お互いの異なる知識に基づく考えを交わらせながら、その共通性や異質性等を浮き彫りにしていくことと理解することができる。その対話的な思考によって新たな発見や気づきが起り、概念や法則に関する理解が深まっていくことで知識の構造が組み替えられていくことになる。そして、自分の考えを再構築していくことができるのは、知識の構造が組み替えられていくからと考えられる(図2)。抽象・一般・普遍の知識が構築されていくためには、理解を深めていく概念や法則は変えずにこの営みを系統的に積み重ねていくことが必要と考えられ、その過程において対話自体が高度化していくことも見通すことが重要である。

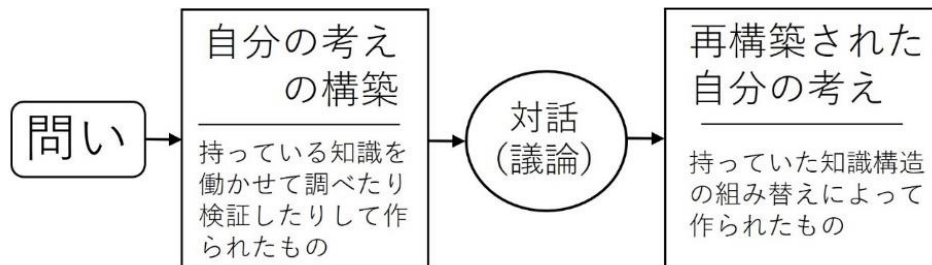


図2 見方・考え方を鍛えるための対話

#### 4. 体育授業実践における対話的な学びの実現

体育授業における対話的な学びに関する研究はいくつか見られる。それらの研究では、どれも対話とはどのようなものなのかということについての検討はなされている。しかしながら、すべての教科を貫く学びの目的を足場にして検討されているものは見当たらなかった<sup>22~25)</sup>。

本項では、跳び箱運動（器械運動）の「切り返し」の概念を利用した小学校3年生の授業実践例を対象に、対話的な学びの意図や意義について考察する。

##### (1) 概念の理解を深めることを企図したカリキュラムの構築

見方・考え方を鍛えることを知識の構造化の視点で捉えるため、その学習に利用するための概念や法則を明確に位置づけることが必要である<sup>26)</sup>。

図3は、器械運動の跳び箱運動において、「跳び箱上に支持し、回転方向を切り返す」という概念を抽出し、理解を深めていく学習の鍵となる中核概念として位置づけて作成されたカリキュラムを示したものである。理解を深めていく概念や法則は変えないようにしていることから、その理解を深めていくことを縦の系統と捉えていることがわかる。

事象や現象の背景にある概念や法則は、物事を包括的に捉えたり、関連付けたりするものと解される<sup>27)</sup>。ゆえに、概念や法則の理解が深まることに伴って、表面的には別物に見える事物・現象や領域的に別の区分に位置付く事柄を、同じ原理の異なる現れとして統合的に把握できるようになると理解できる<sup>28)</sup>。ブルナーは構造を教える意義として、次の4点を述べている<sup>29)</sup>。

- ・教科の基本的な構造を理解すれば、教科の内容を理解しやすくなる。
- ・構造を理解し記憶しておけば、関連する細かい部分はそれをもとに再構成したり、思い出したりできる。
- ・構造は一般性をもつ基礎的な概念なので、後に出合う事柄を、すでに習得している構造の特殊事例として理解することができる。
- ・構造を重視すれば、小・中学校で学ぶ初歩的な知識と高校や大学で学ぶ知識との間のギャップを狭めることができる。

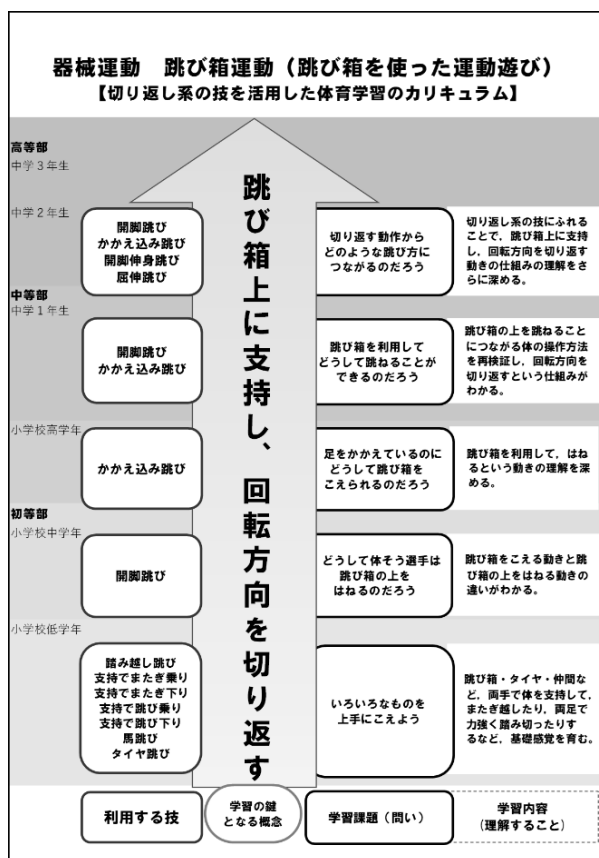


図3 学習の鍵となる概念を中核に据えたカリキュラムの構築

知識の構造が整理され洗練されれば、見方・考え方を高度に働かせることができるようになることとなり、物事をシンプルに捉えることができるようになっていくものと考えられる。

概念や法則の理解を深めることを意図したカリキュラムを構築していくことは、系統的に概念や法則の理解を深めていくことを見通すこととなり、そのために具体的にどのような内容を取り扱い、どのような問いを立てていけばよいのかを明確にしていくことができるというところに意義を見出せると考えられる。

### （2）対話的な学びを意図した単元の流れ

これまでの運動種目を主体とした体育授業では、上手くできるようにするためにはどうすればよいかを追究していくようなことが学習とされてきた。その学習は、運動の行い方や上手くできるためのコツを知ることにとどまる。しかしながら、それは具体的な運動種目に関する要素的・個別的な知識であり、その知識が得られるからこそ、その内実を追究していくための問いが生み出され、探究する学習に展開していくことができるものと考えられる。ある問いの背景には、その問いが生み出されるための基礎的な知識が存在していると考えられるからである<sup>30)</sup>。それらは具体・特殊・個別の知識であり、その奥底に内在している概念や法則に気づいたり理解を深めたりしていくことを目指していくこととなる。見えないものを探究していくことと考



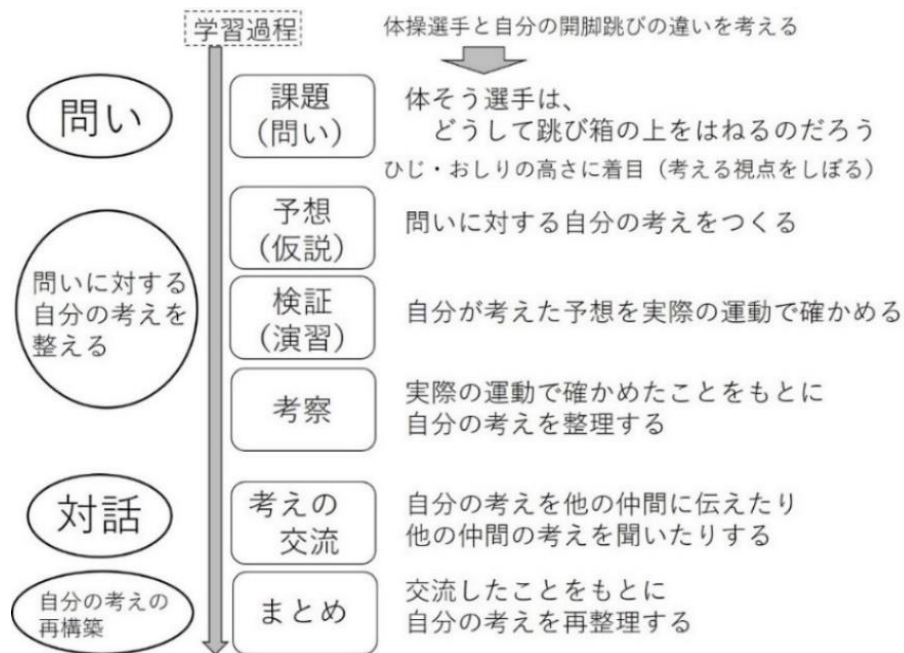


図4 対話的な学びを意図した単元の流れ

えられ、見える事象や現象に対して、「なぜ、どうして、どういうこと」という方向へ問うていくことで、その構造を探究していくことへ向かうことができると考えられる<sup>31)</sup>。

図4は、対話的な学びを意図した単元の流れの事例を示したものである。跳び箱運動の開脚跳びを対象に、体操選手と自分たちの開脚跳びの違いに目を向けさせ、体操選手の跳びはねる動作に焦点をあてて、学習の問いを生み出そうとしているものである。

「なぜ、どうして、どういうこと」という問いに対して、どの子も自分の考えを作ることが大切にされなければならない。それは、それぞれの子どもの知識の状態を表現しているものだからである。そして、それぞれの子の具体・特殊・個別の知識を駆使して作られた考えを交わらせる対話において、共通性や異質性を見出したり、それぞれが考えた内容を結合しようとするような議論が生まれ、抽象・一般・普遍にまで高められていくことになると考えられる。もちろん、一回の単元における対話によってすぐに高められるわけではない。何度も繰り返し対話を積み重ねていくことで、徐々に高められていくものと認識することが必要である。だからこそ、中核となる概念は変えずに学習が積み重なるようにしていくことの必要性が理解されると考えられる<sup>8)</sup>。

### (3) 対話的な学びにおける子どもの実情

本稿で考察した授業実践の対象児童は小学3年生である。そのため、探究する視点をひじとおしりの高さにしぼって、どの子も自分の考えを作ることができるような手立てが講じられている。その結果、どの子も、探究の視点に基づいて予想を立て、実際の運動で確かめながら自分の考えを作ることができていた。実際の運動で確かめたことをもとに自分の予想からの修正

を行っている子も見られた。

以下は、子どもたちが学習カードに記述した自分の考えを抜粋して示したものである。

(児童 A) ひじは、いちばんひじをのばすのがやりやすいです。なぜかという、グッととびばこをおせるからです。そのはんたいにやりにくいほうほうは、ひじをまげることです。なぜかという、まげると体を支えられないからです。

(児童 B) わたしが実さいにやってみて分かったことは、さいしょは「さいしょまげてのばす」だったと思ったけど、実さいにやってみたら「ひじをのばす」が自分にとって一番やりやすいことが分かりました。ぎゃくに「さいしょまげてのばす」はとてもやりにくいことが分かりました。

(児童 C) わたしはひじをのばしたままと予想しました。でも実さいにやってみると、まげる→のばすの方がやりやすかったです。理由はまげることでききおいがついてさらに体をささえられるので、とびばこの上をはねてとべるからです。

自分で作った考えをもとにグループで伝え合う交流活動が行われた。どの子も自分の確かな考えを持っていることから、グループの仲間に一生懸命伝えようとする姿が見られるものであった。また、伝える際に自分の運動で確かめた感覚をたよりに、椅子から立ち上がって身振り手振りを交えながらなんとか分かってもらうおうとする姿が多く見られた。このような姿が、確かに自分の考えが作られていることの証と考えられる。一部の子の考えで進んでいってしまうような授業を見つめ直す示唆が得られるものであった。

しかしながら、お互いの考えを伝え合い、自分と似ている所や違っている所に目を向けた子も見られたものの、もう一度自分の考えを再整理する所では、はじめに作られた考えから再構築されているというような記述は見られなかった。これは、本研究に係る授業実践の対象である小学3年生の子どもたちの実情として受け止めることが必要である。はじめは、自分の考えをつくって相手に伝えることから始まり、相手の考えを聞く、相手がどのような立場で考えを話しているのかを読み取る、というように対話的な学びが高度化されていくことを見通していくことも重要な観点のひとつとして捉えられた。

## 5. 見方・考え方を鍛えるための体育授業における「対話的な学び」

体育授業では、取り扱う運動種目に内在する仕組み等を対象に、表面的に見て取れる動きの事象や事実等に関連付けたり包括的に捉えたりすることのできる概念や法則の抽出が必要と考えられた。そして、抽出された概念や法則の理解を深めることを目的とした対話的な学びが展開されなければならない。その実現において、まず、概念や法則の理解を縦の系統に据えたカリキュラム構築の重要性が確認された。また、単元の枠において対話的に思考する構成が考えられた。具体的には、運動の事実や事象に対して立てられた問いに対して仮説(予想)を立て、実際の運動によって検証し、問いに対する自己の考えを作る。その考えを仲間と伝え合い、共通性や異質性を見出そうとしたり、考えた内容を結合して新たな考えを生み出そうとしたりする議論を行う。そのような営みの積み重ねは単元を線でつないでいくことであり、運動種目における運動の仕組み等に関連付けて捉えたり包括的に捉えたりすることのできる見方・考え方を育成していくことの可能性が考えられた。

## 6. まとめ

本稿は、すべての教科を貫く目的として見方・考えを鍛えるという目的に迫る足場から対話的な学びについて検討した。その検討において、今次の学習指導要領で求められている資質・能力とはどのようなものなのか、またどの次元で検討しなければならないものなのか、そのような視点に立ち止まることの重要性が再認識された。

## 参考文献

- 1) 文部科学省 (2016) 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について, 中央教育審議会 (答申) 平成 28 年 12 月 12 日.
- 2) 日本体育科教育学会 (2019) 「主体的・対話的で深い学びの実現に向けたこれからの体育授業」課題研究 (基調講演・シンポジウム) 報告, 体育科教育学研究, 35(1): 17-46.
- 3) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説体育編, 東洋館出版社.
- 4) 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説保健体育編, 東山書房.
- 5) 文部科学省 (2015) 資料 6 「言語活動の充実に関する検証改善」の成果について, 教育課程企画特別部会,  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/attach/1358722.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/attach/1358722.htm)  
(2022 年 11 月 5 日).
- 6) 森勇示 (2012) 体育科における「言語活動の充実」への懸念, 愛知教育大学保健体育講座研究紀要, 37:7-13.
- 7) 文部科学省 (2015) 教育課程企画特別部会 論点整理.
- 8) 奈須正裕 (2017) 「資質・能力」と学びのメカニズム, 東洋館出版社.
- 9) 野津一浩 (2022) 見方・考え方を鍛える=知識の構造化, 見方・考え方を鍛える体育の授業づくりー体育の教科内容を捉え直すー, 体育科教育, 第 70 巻第 5 号, pp. 68-72, 大修館書店.
- 10) 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 東洋館出版社.
- 11) 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 東山書房.
- 12) 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領解説 (平成 29 年告示) 国語編, 東洋館出版社.
- 13) 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領解説 (平成 29 年告示) 社会編, 東洋館出版社.
- 14) 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領解説 (平成 29 年告示) 数学編, 日本文教出版大阪.
- 15) 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領解説 (平成 29 年告示) 理科編, 学校図書.
- 16) 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領解説 (平成 29 年告示) 音楽編, 教育芸術社.
- 17) 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領解説 (平成 29 年告示) 美術編, 日本文教出版大阪.
- 18) 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領解説 (平成 29 年告示) 技術・家庭編, 開隆堂出版.
- 19) 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領解説 (平成 29 年告示) 保健体育編, 東山書房.
- 20) 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領解説 (平成 29 年告示) 外国語編, 開隆堂出版.
- 21) 池上彰 (2022) 社会に出るあなたに伝えたい なぜ, いま思考力が必要なのか?, 講談社.
- 22) 山本穂波・八田篤司・加登本仁 (2018) 中学校マツト運動の授業における「対話的な学び」に関する事例研究, 滋賀大学教育学部紀要 教育科学, No.68, pp. 23-37.
- 23) 溝口仁志・橋本忠和・小松一保 (2020) 小学校体育科の対話的な学びと互恵的な協力関係との関連性についての一考察, 北海道教育大学紀要 (教育科学編) 第 70 巻第 2 号, pp. 357-

372.

- 24) 軽部雄介・渡邊将司 (2022) 児童が自己の運動の課題を見つけ主体的・対話的で深い学びを実現する体育科学習指導の在り方, 茨城大学教育学部紀要 (教育科学) 71 号, pp. 169-185.
- 25) 古閑美鈴 (2022) 対話的な学びの実現を目指す小学校体育授業の研究—二人称的アプローチに着目した第5学年ボール運動ネット型の実践を中心に—, 佐賀大学大学院学校教育学研究紀要, 第6巻, pp. 274-286.
- 26) 石田達一郎・片山径介・野津一浩 (2022) 「見方・考え方を鍛える」視点からの体育授業の構想—教科観の問い直し—, 静岡大学教育実践総合センター紀要, No.31, pp. 91-101.
- 27) 板倉聖宣 (1969) 科学と方法, 季節社.
- 28) 奈須正裕 (2021) 「少ない時数で豊かに学ぶ」授業のつくり方 脱「カリキュラム・オーバーロード」への処方箋, ぎょうせい.
- 29) J. S. ブルーナー, 鈴木祥蔵/佐藤三郎訳 (1963) 教育の過程, 岩波書店.
- 30) 岩田一彦 (1993) 小学校 社会科の授業分析, 東京書籍.
- 31) 野津一浩 (2022) 教科として学ぶ体育の「問い」, 見方・考え方を鍛える体育の授業づくり—体育の教科内容を捉え直す—, 体育科教育, 第70巻第8号, pp. 60-63, 大修館書店.